



Title	The Temple of My Familiar における「色」
Author(s)	太田, 瑞穂
Citation	Osaka Literary Review. 1993, 32, p. 81-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25457
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

The Temple of My Familiar

における「色」

太田 瑞穂

I

アリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) は、詩集、エッセイ集を含めてこれまで 14 の作品を発表しているが、そのうちの 2 つの作品のタイトルに色が使われている。*The Color Purple* (1982) では、「紫色」(“the color purple”) は、人間の可能性あるいは他者や自然を愛することを意味している。¹⁾ また、*Her Blue Body Everything We Know* (1991) という詩集では、「青」は、母性のイメージで描かれている地球の色を指している。²⁾ このように、「紫」や「青」といった「色」は、比喩的に使われており、作品のテーマと深く関わっている。*The Temple of My Familiar* (1989) においても、「色」はこの小説の中心的なモチーフと密接なつながりがある。本論では、どのような場面で「色」が存在するのか、あるいは存在しないのか、そして「色」の出現を抑制するものは何かを考察しつつ、この作品における「色」の意味を明らかにしていきたい。

The Temple of My Familiar の主人公リシー (Lissie) は、太古から現代までさまざまに化身を繰り返す。リシーとは「何でも覚えている人」³⁾ という意味であり、かつてアフリカから奴隷船に乗せられたことも、白人女性や白人男性であったことも、そしてライオンであったことも記憶している。リシーの「記憶」の「語り」がこの小説の中心をなす。リシーの「語り」は、アフリカの弾圧や黒人の迫害の歴史をこれまでとは別の視点から明らかにするとともに、男性と女性、白人と黒人、人間と動植物に対する既成概念を打

ち破り、新しい見方を浮かび上がらせる。こうしたさまざまな問題を「色」という観点から分析していく。

II

この小説にはさまざまな色が溢れているが、最も重要な色の一つが「青」である。リシーは夫ハル(Hal)に夢で見た「神殿」(“temple”)は四角い部屋から成り、ピラミッドのような形をしていて、珊瑚色の壁には「トルコブルー」(“turquoise”)や「濃紺」(“deep blue”)で絵が描かれていると説明する。また、彼女の「ファミリア」(“familiar”) (118)は、羽があるので鳥のようでもあり、泳げるので魚のようでもあり、さらに爬虫類のようでもあり、全体の色は主として「青」(“blue”) (119)であると語る。

ところで「ファミリア」は、「仲間」(“companions”)、「友達」(“friends”) (356)とほぼ同じ意味で使われているようである。さらに、「ファミリア」は、それを持つ人の「本質」(“essence”) (126)を象徴するものであり、時代によっては女性だけが持つことができるとされている。一般に「ファミリア」は、中世において魔女が自分の意思を伝達するのに使った小動物であり、魔女の精神を体現し、しばしば魔女のダブルであると考えられていた。⁴⁾ この作品には、後に、オウム、ヘビ、フクロウ、カメ、ライオンなどが人々の「ファミリア」として登場する。ウォーカーは、「ファミリア」を人間の、特に女性の内面すなわち精神を象徴するものとして用いている。

テキストに最初に現れた「ファミリア」の色も、「神殿」の色も主として「青」であったが、この色には特別な力が備わっている。*The Color Purple*のセリー(Celie)によれば、「青」は、「エネルギー」(“energy”)を発し、「パワー」(“power”)を放つものである。この「青」を身につける人は、「にわかに自身がつき、強くなって、それまでになく存在感ができ、強烈になる」(145)という。実際セリーの娘オリヴィア(Olivia)は、セリーが「パワー・ブルー」(“Power Blue”) (147)と名付けた生地で作ったパンツ

スーツを着ると活力が全身にみなぎるのを感じたと述べる。

「青」は、黒人女性に限らず、白人女性にも特別な意味をもっている。ウォーカーは、これまでのどの作品よりも、白人女性と黒人女性との関わりを描くことに力を注いでいる。また、白人女性の過去の物語は、興味深い視点を提示してくれる。金髪の巻き毛をもつメアリー・アン・ハーヴァーストック (Mary Ann Haverstock) は、アメリカの資産家の娘で、かつて過激派に加わり、ラテン・アメリカのジャングルの学校からゼデ (Zedé) とカーロット (Carlotta) を救い出す。莫大な遺産を相続してお金に溺れそうになった自分に嫌気がさし、名前をメアリー・ジェーン・ブライデン (Mary Jane Briden) と変える。自分の過去を知るために「ザ・カミング・エイジ」 (“*The Coming Age*”) という名の船を仕立て、ロンドンに向かう。その船の帆に、彼女の精神を表すものとして、「トルコブルー」のヘビを刺繍する。「トルコブルー」を選んだのは、その色は「体と精神を洗い清める色で、記憶をはっきりさせ、病気を治す強い力を持っている」(207) からである。今までの自己と決別し、過去の糸をたぐり寄せて、新しい自分を見いだそうという意志が、「トルコブルー」という色に投影されている。また、ヘビは、メアリー・ジェーンの「ファミリア」であると考えられる。ロンドンで大叔母の叔母にあたるエレアンドラ・バーナム・ピーコック (Eleandra Burnham Peacock) の日記を読んで触発され、彼女はオリンカに美術学校を創設する。三十年にわたりアフリカの文化の向上に貢献したメアリー・ジェーンは、髪の毛を「りんどう色の青」 (“*gentian blue*”) (346) に染める。この「青」は、アフリカの子供たちに夢と希望を与えるという役割を果たすことになったメアリー・ジェーンの「パワー」そして人間的な成長を表していると言えるであろう。

III

テキストにおいて、どのような場合に「色」は存在しないのであろうか。

「色」が存在する場合と対比しつつ考察していく。まず、現代社会や都市における「色」を例にとりあげる。カーロッタの母ゼデは、オウムやクジャクの羽を使って美しい衣装を作り、それを売って生計をたてる。彼女は、最近の鳥の羽は質が落ち、完全に色づく前にむしり取られているから、「昔のような溢れるばかりの豊かな色合いが出せなくなった」(4)と嘆く。つまり、現代においては、昔のような鮮やかで「豊かな色合い」(“the full richness”)が失われてしまっているのである。都市も、同じ状況にある。都市の通りは、「およそ文化的ではなく、最も色が無い」(“the city’s least colorful or cultured streets”) (10)と描写される。また、都市は、「灰色」(“grey”)で、「曇っている」(“foggy”) (6)と形容されており、色彩を感じさせない。これに対して、エスニック・グループの一つであるモン語族は、赤ん坊の着物にいたるまで色彩豊かで美しいものを作り上げる発達した文化をもっている。赤ん坊は、鏡、鈴、貝殻やビーズなどの飾りのついた「色とりどりの」(“multicolored”) (10)衣服をまとっている。

次に、男性と「色」の関係を検討していく。スウェロ (Suwelo) は、はっきりとした色よりも「白」を好むと主張する。

彼は白い壁のほうが好きだった。(中略)強い色は人の注意を引こうとし、何らかの反応を引き出そうとするので圧迫感を受ける。白一色に囲まれていると、自分自身や、家具調度類、芸術の色に注意を向けることができる。(175)

スウェロは、「白」に囲まれていると落ち着き、心の内側へと意識を向かわせることができる。また、「白」を好むということは、人の注意を引きたくない、目立ちたくないという消極的な姿勢を表している。そして、この時点では、スウェロは自分の過去について語ることができず、自分が何者であるかが理解できないという状態にある。いわば、アイデンティティ喪失が「白」で表されているのである。また、「白」はまわりのものを浮かび上がらせ、それ自身は背景へと退く。「白」は背景として「芸術」(“art”)を際立た

せる役割を果たしている。言い換えれば、「白」の担い手としての男性は、「芸術」を創造する主体ではなく、それを鑑賞する客体にすぎないということである。

男性の立場とは逆に、女性は、色彩豊かな「芸術」を生み出す者として位置づけることができる。女性は、さまざまな色を用いて絵を描き、この絵を描くという「芸術」を通して自らのアイデンティティを主張する。ファニー（Fanny）の父親オーラ（Ola）は、伝統的に、オリンカの女性たちが家の壁に「鮮やかな」（“vivid”）（162）色で絵を描いてきたと説明する。ファニーの腹違いの妹ンジンガ（Nzingha）の母親も、オリンカの伝統に忠実に、大胆な色彩で幾何学的な模様を壁に描く。さらに、彼女はキリンを壁中に描く。キリンは彼女の「ファミリア」ともいうべきものである。彼女は毎年乾期の頃にキリンの色を塗り直すのであるが、娘と夫が彼女のもとを去ったあと、色を塗るのをやめてしまう。色褪せて、幽霊のようにぼやけたキリンは、彼女の深い悲しみ、絶望を表している。

このように、オリンカの女性たちが壁に色を塗り、絵を描くという行為は、自分たちの存在を示すためであったが、なぜこれほどまでにこの行為にこだわったのであろうか。オリンカの独立のために、女性たちは男性と力を合わせて戦ってきたが、ひとたび新しい政府が樹立されると、女性たちの活躍は忘れ去られてしまう。公民権運動に参加したアメリカの黒人女性も同じ状況におかれている。ほとんどの男性は「女のいるべき場所は家庭、女のとるべき姿勢は仰向け」（29）と望んでいるとスウェロは打ち明ける。こうした子孫を殖やすという役割のみをあてがわれた女性は怒り、屈辱を感じる。歴史の外におかれた女性たちは、自らの生の証をたてるために、全精力を傾けて、自分たちの「色」を塗ろうとするのである。スウェロは「人の注意を引く」ことを嫌っていたが、これとは逆にウォーカーは、記憶のかなたに葬り去られている女性たちの歴史を掘り起こし、女性と鮮やかな「色」を結びつけ、人々に気付かれることを強く望んでいるように思われる。

ウォーカーは、さらに、女性が身につける「色」に特別な意味合いを与え

ている。ゼデは、その昔地球を作り出したのは女神であり、また女性には超自然の力が備わっていて、それを示すためにさまざまな色の羽、貝、石や草花で身を飾ったと語る。つまり女性の衣装や装飾品がもつ豊かな色彩は、女性の「超自然性」(“supernaturalness”) (49) を象徴している。また、昔は、女性のみが司祭になることができ、司祭は色鮮やかな豪華な衣装をまとっていたという。神聖な者だけに「色」が許されるのである。

さて、「色」の有無を問題にすれば、白人と黒人の皮膚の色がどのように描かれているかを考察する必要がある。スウェロの「白」は「無色」に近かったが、白人の「白」についても似たようなことが言える。例えば、オリンピックの人々は、白人は「未熟な」(“immature”) (159) 外見をしているとみなし、成長した胎児のようであると述べる。また、リシーは、かつてアフリカの黒人社会で白い肌をもった男の子として生まれたことがあったと語る。初めて自分の姿を泉に映したとき、肌の色が、母、姉妹、友達の誰とも異なっていることを発見して驚きの声をあげる。

そして私がいた。幽霊。ただ、当時は幽霊というものの存在を知らなかったから比べることもできなかったがね。たしかに私には皮膚がないように見えた。(中略) 私はただどこかに身を隠したいという思いしかなかった。縮れてはいるけれども、薄い黄色の髪の毛、これは夏の終わりのわらの色だ。そして小石のような目。そして全く色のない肌。(360)

「白」はリシーにとっては「全く色のない」状態を意味する。このような肌をもつリシーは、「幽霊」のように実体がなく、「皮膚がない」かのように透明でとらえどころがない。自分の存在が否定されているように感じているので「色」がないのである。自分の肌の色が周囲の人々とは違うことを認識したリシーは、悲しみ、深く傷つく。彼女は母のもとを離れる決心をし、孤独に暮らす。このエピソードは、白人中心主義の社会で、黒い肌をもって生まれたがゆえに人種差別に苦しむという、アメリカの社会における黒人の状況の裏返しであると言えよう。現実の社会での白人と黒人の立場を逆転させる

ことによって、マイノリティーのグループが受ける人種的偏見の不当性が浮き彫りにされる。

このように「白」は、「無色」で「透明」で「実体がない」ものであり、否定的な意味をもっている。これとは対照的に、「黒」は肯定的なイメージで描かれている。ファニーはスウェロに、昔々、黒人は太陽を女神として崇め、太陽からも愛されており、こうした黒人と太陽の親密な関係を妬む白人は、やがて黒という色を呪うようになったのだと語る。「黒は太陽が愛する色である」(319)という考え方には、「黒」に肯定的な意味を見いだそうとする新しい視点がうかがえる。これは、明らかに、「黒は邪悪で悪魔の色である」⁵⁾とする伝統的な概念に挑戦するものであろう。

IV

「色」の出現を阻もうとする要因は大きく分けて二つある。一つは、白人男性や白人女性、あるいは黒人男性という外的要因であり、もう一つは、自分自身による抑圧という内的要因である。これらの要因を具体的に検討していくとともに、「色」そのものが何を表しているのか、また、「色」が剝奪されるというのは何を意味しているのかを考察していく。

黒人から「色」を取り上げようとするのは、白人である。白人は黒人が自分たちの家に色を塗ることを阻もうとする。白人が黒人に生活に必要な最低限の給料しか支払わない理由の一つは、黒人が余分なお金を持っていれば家を塗るペンキを買うかもしれないと恐れたからであるという。「白人は私たちがどんなに色が好きで、また色が似合うかを、よく知っていたから」(298)とファニーは述べる。これは、もちろん、白人がほんの少しの給料しか払わない本当の理由ではないかもしれない。しかしながら、笑いを誘うような理由を自分たちで考え出すことによって、現実での生活の困窮がいくらかでも耐えやすいものになるのである。白人の経済的な抑圧によって、黒人は「色」が奪われている。ところが、実際には、彼らは青粉と白い泥を混ぜたもので、

暖炉を「目もさめるような青」(“brilliant blue”) (298) に塗っているの
である。どんなに貧しくても心は豊かであるということを暖炉の「青」は物
語っている。白人に支配され、抑圧されてはいても、精神は自由であるとい
う彼らの誇りを示すかのように、燦然と「青」が輝いている。

リシーはかつて白人の女性であったこともあると重い口を開いて夫ハルに
語りだす。奴隷として連れて来られた黒人女性が身につけていた「金」や
「銀」の装身具の美しさに引かれ、リシーはそれらを自分のものにする。そ
れらの装身具は「粗野ではあるけれども豪華」(“savagely gorgeous”) で
「魔女がつくった」(“witchcraft”) (354) ものであるかのようにであったとリ
シーは語る。彼女は、これらの装身具に対してその美しさに魅せられると同
時に、「粗野」や「魔女がつくった」という言葉からうかがわれるように、
軽蔑の念も抱いている。これらの言葉は、白人が生み出すことのできないも
のを持っている黒人への嫉妬の裏返しであるということもできよう。リシー
が白い腕や首につけた光り輝くものは、「彼ら自身や子孫が二度と目にする
ことのできない、彼らの歴史であり、芸術であり、文化なのだ」(354) と彼
女は気づく。すなわち、「金」や「銀」の装身具は、黒人の「歴史」、「文化」、
「芸術」そのものを表している。「金」、「銀」の装身具を取り上げることは、
彼らの「色」を奪うことであり、それは、黒人の「歴史」、「文化」、「芸術」
までも剥奪することである。白人女性は黒人から「色」を奪うことに飽き足
らず、それを所有しようとする。これは、黒人の「色」に対する白人の憧れ
のあらわれである。白人は、とりわけ「金」に強く引かれる。「白人が金を
崇めたのは、それが白人が失った太陽の代わりであったからだ」(354) とリ
シーは説明する。

白人男性、白人女性のみならず、黒人男性が黒人女性から「色」を奪うこ
とがある。リシーはかつてアフリカに住んでいた時、奴隷として売られた経
験を記憶している。リシーは自分たちの部族に「固有の」(“distinctive”)
色である黄色と赤と白で織られた「色彩に富んだ」(“colorful”) 布を腰に
まとう。伯父の手によって奴隷商人に売り飛ばされる際、この腰布は取り上

げられ、代わりに「染められていない」(“plain”) (62) 布が渡される。「黄」、「赤」、「白」といった自分たちのアイデンティティを表す「色」が男性や白人によって奪われ、「色」のない状態へと追いやられてしまう。染色し、布を織ることは女たちに許された唯一の自己表現の手段である。「光り輝く」(“resplendent”) (47) 布が土に塗れた貧しい者の手によって、魔法のように生み出されることを誇りに思う女たちは、布を織るという行為を神聖化し、そこから限りない充足感を得る。色鮮やかな布を織り、身につけることによって、女たちは日々の過酷な労働の苦しみを乗り越え、生きる希望を見いだす。さらに部族に「固有の」色で布を織ることが、祖母から母へ、母から娘へと受け継がれる限り、その部族は存在し続け、かつ織り手自身も布を織るという「芸術」(“art”)を通して、自己を解放し、自分の存在を確認することができる。

白人社会、男性社会という外的要因によって「色」の出現が抑制されていたわけであるが、自分自身による抑圧という内的要因が関与していることもある。リシーは死の直前に、さまざまに化身してきた姿を何枚もの絵に残す。リシーが最後に描いた木にぶらさがった白い男の絵を見て夫ハルが、「それに色を塗るのを忘れたようだな」と言うと、彼女は、「いいえ、それがその男の色なの」(414) と答える。リシーは、白人の男であったことを故意に自分の記憶から抜き取っていたために、一連の肖像画の中にその姿を描くことができなかった。「ファミリア」を殺すという男性や白人がもっているのと同じ残虐性が自分の中にもあることを認めてはじめて「白」が出現する。「白」は「無色」でも「透明」でもなく、「残虐性」という人間の特性を表している。人間は常に被抑圧者であるのではなく、抑圧者にもなりうるのである。人にも自分にも隠していた「空白」部分に「白」を塗ることは、無意識に抑圧していた「負」の自己を解放することである。

V

リシーが残した最後の絵の「生命の木」(“the tree of life”) (415) には、黒人、白人、男性、女性、さらに、ヘビやライオンも含めたあらゆる生物が描かれている。ヘビやライオンは女たちの精神を体現する「ファミリア」であるが、「ファミリア」には「親しい人」、「仲間」、「友人」という意味もあるので、肌の色や性別の異なる人間も、そして動物もすべて「ファミリア」である。聖書をパロディー化した「シャグ (Shug) による福音書」(“*The Gospel According to Shug*”) (287) には、「動物や植物のあらゆる色を愛するのと同じように、すべての人間のあらゆる肌の色を愛するものは救われる」(289) という一節がある。人間、動物、植物にはそれぞれ「色」があり、ウォーカーは、それらすべての「色」が認められることを望んでいる。ウォーカーの理想を象徴しているのがさまざまな「色」で塗られたリシーの「生命の木」であろう。これがまさに *The Temple of My Familiar* すなわち、人間、動物、植物が調和のとれた状況にある世界を表していると言えるであろう。

最後に、ウォーカーの創作姿勢や作品世界と「色」との関係について触れておく。アメリカの歴史を教えているスウェロは、白人の歴史を教え、その説明の中に黒人の歴史を潜り込ませると言う。このようなやり方は、「元の図案から省略されていた部分や色をすべて編み込んでいく」(179) ようなものであると説明する。この言葉には、ウォーカーの創作姿勢が凝縮されているように思われる。ウォーカーは、歴史から「省略されていた」(“omitted”) 黒人の、特に黒人女性の歴史すなわち「色」をその作品世界に描きだそうとしている。そして、*The Temple of My Familiar* を含めた4つの小説は、それぞれ特定の「色」を帯びていると同時に、織り合わさって豊かな色合いの織物をつくる。基調となる色は「黒」、「黒」と「白」のモノトーン、「紫」へと変化し、*The Temple of My Familiar* においては「青」が中心となり、色が溢れている。このように欠けている「色」を作品ごとに少しずつ補っ

ていく手法は、黒人であり、女性であるウォーカーが作家として目指す姿勢を反映していると言えるであろう。

注

本稿は、第31回日本アメリカ文学会全国大会（1992年10月17日、於成蹊大学）における発表原稿に加筆修正したものである。

- 1) 「紫色」の解釈は、批評家によって幾分異なる。Barbara Christian によれば、それは「自然の本質である感覚的な精神性」を表している。(Barbara Christian, "No More Buried Lives," *Black Feminist Criticism* [New York: Pergamon Press, 1985], p. 190.) また、Gloria Steinem は、「人間の可能性という奇跡」を象徴していると考える。(Gloria Steinem, "Do You Know This Woman? She Knows You: A Profile of Alice Walker," *Ms.* June 1982: 90.)
- 2) Alice Walker, "We Have a Beautiful Mother," *Her Blue Body Everything We Know* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1991), pp. 459-60. この詩は、"Her blue body/everything/we know." という一節を含んでいる。
- 3) Alice Walker, *The Temple of My Familiar* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1989), p. 52. 以下この作品からの引用はこの版により、ページ数のみを記す。
- 4) *Standard Dictionary of Folklore, Mythology, and Legend* (New York: Funk & Wagnalls, 1972) によると、「ファミリア」は、従者、召使、使者として魔女や魔法使いと結びついている動物や鳥のことで、普通、悪魔などの "spirit" を体現していると考えられていた。また、しばしば魔女や魔法使いのダブルであると見なされていた。
- 5) 「黒」のもつ否定的な意味合いは、*Webster's Third New International Dictionary* の定義からも読み取れる。「黒」は「きわめて邪悪で」(6a)、「不名誉、恥辱、不信を示す」(6b) のものであり、「超自然的存在、特に悪魔の悪い面と結びつく」(7) ののである。